松江市文化財調査報告書 第105集

文化財愛護
シンボルマーク

片江地区地すべり対策工事に伴う

平畑遺跡発掘調査報告書

２００６年３月

松江市教育委員会

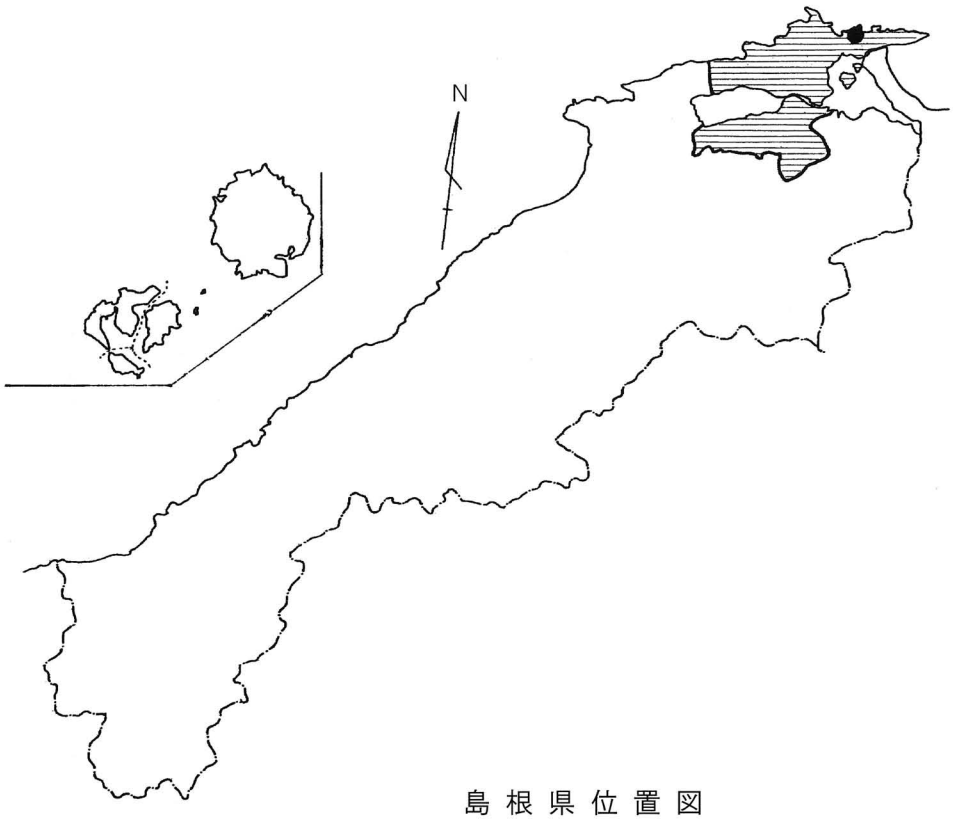
松江市文化財調査報告書 第105集

片江地区地すべり対策工事に伴う

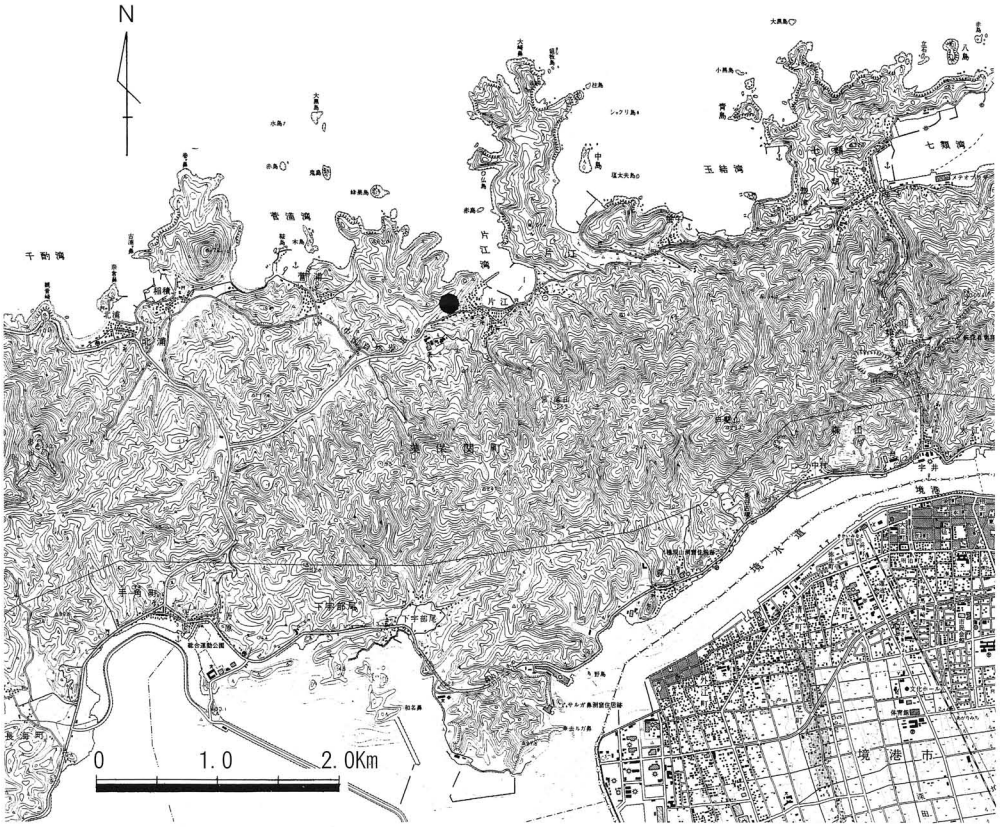
平畑遺跡発掘調査報告書

２００６年３月

松江市教育委員会



島根県位置図



平畑遺跡位置図

例　　言

1．本書は、平成１７年度において松江市教育委員会が片江地区地すべり対策工事に伴い実施した平畑遺跡発掘調査事業の報告書である。

2．本事業の実施体制は下記のとおりである。

工事主体者　島根県松江土木建築事務所

調査主体者　松江市教育委員会

調査体制　教育長　福島　律子

副教育長　川原　良一

参事　岡崎雄二郎

調査係長　飯塚　康行

主幹　赤澤　秀則

主任　松浦　俊充

副主任　川上　昭一

主事　藤井　一

調査補助員　原　英誉、小山　泰生、高橋真紀子

3．本報告書の執筆担当は次のとおりである。

編集・執筆　松江市教育委員会文化財課 飯塚 康行

遺物実測　松江市教育委員会文化財課 小山 泰生

図面作成　松江市教育委員会文化財課 小山 泰生

遺物整理　松江市教育委員会文化財課 荻野 哲二

4．本書に掲載した出土遺物、写真、実測図は、松江市教育委員会文化財課で収蔵・保管している。

文化財愛護シンボルマークとは…

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗栱（ますぐみ）、すなわち斗（ます）と栱（ぐみ）の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重なることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護
シンボルマーク

目　　次

第１章 調査に至る経緯 …… 1

第２章 位置と歴史的環境 …… 1

第３章 調査の概要 …… 3

第４章 小　結 …… 11

出土遺物観察表 …… 12

遺構写真図版 …… 13

遺物写真図版 …… 14

第１章　調査に至る経緯

平畑遺跡は、島根半島の北東部、日本海を望む片江湾の最奥部のなだらかな南向き斜面に位置する。斜面一帯は畑地として開墾されており、表面には土器の破片が多数散布している。

島根県松江土木建築事務所では、この一帯が地すべり地帯であることから、対策事業として集水井の設置を計画したが、その位置が平畑遺跡の範囲に含まれる可能性があったことから、平成17年6月20日付け、松土第1963号で松江市教育委員会あてに埋蔵文化財分布調査依頼書が提出され、これを受けて同年7月6～8日にかけてトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、古墳時代から奈良時代にかけての土器片などを検出した。その後の協議の結果、遺跡保護のための計画変更は困難であるとの結論に至り、島根県松江土木建築事務所からの受託事業として本発掘調査を実施することとなった。調査は平成17年8月30日～9月12日までの合計7日間で、調査面積は30㎡である。

第２章　位置と歴史的環境

島根半島の東部、美保関町地内の遺跡分布状況は、日本海に面した北側で遺跡数が少なく、古墳時代以降の遺跡が湾（入り江）を中心として点在する状況が確認されているのみで、古墳時代以前の遺跡はこれまでにまだ発見されていない状況である。

平畑遺跡（１）は旧片江小学校裏山の標高約20ｍを測る南向き緩斜面一帯に存在し、古くから須恵器や土師器の散布地として知られている。遺跡の立地条件や遺物の散布状況などから集落跡の可能性が指摘されている。

片江横穴墓群（２）は標高70～80ｍを測る東向きの斜面に8穴確認されている。天井が整正家形の整美なものや丸天井系のものがあるが、羨門部に石組施設を持つ横穴が6穴ある点が注目される。

方結神社裏山古墳（３）は方結神社の裏山に存在するが、すでに墳丘は失われており、箱式石棺が露出している。

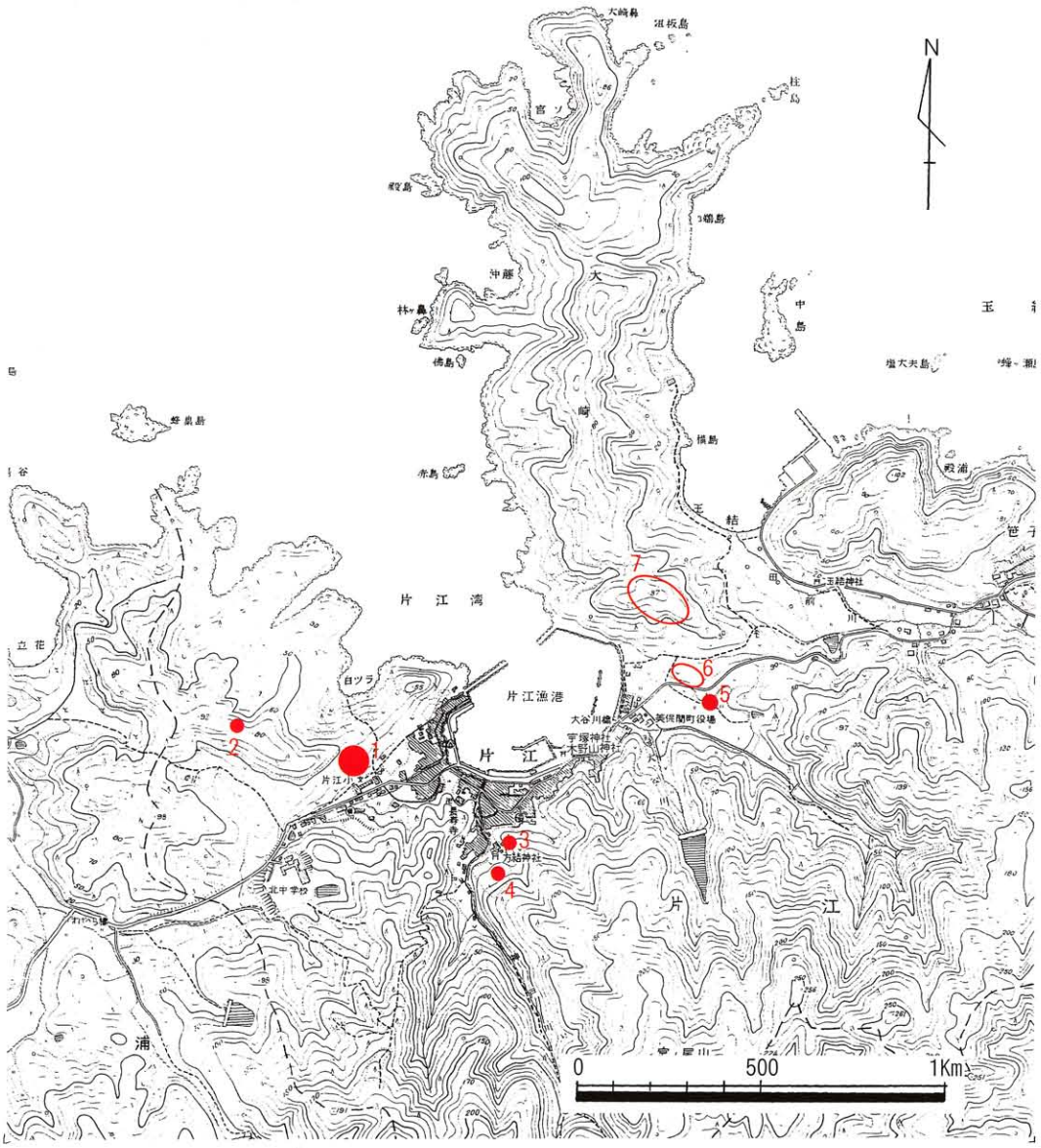
上谷遺跡（４）は方結神社南側の丘陵斜面に位置し、宅地造成の際に発見された遺跡である。須恵器の坏や高坏、土師質の土製支脚などが発見されている。

小丸山古墳（５）は片江湾東部の県道沿いに位置する。現在ではわずかに墳丘を残すのみであるが、本来は石室を持つ古墳であったことが伝えられている。

向畑古墳群（６）は片江湾東部の標高20ｍを測る緩斜面に位置する。後世の開墾で破壊されているが、石材の散乱状況から、本来は石室を持ち6基程度からなる古墳群であったものと推定されている。

丁馬古墳群（７）は片江湾東部の標高70～90ｍを測る丘陵尾根筋上に位置する古墳群で、4基が確認されている。いずれも10～13ｍ程度の墳丘を持つ小型の古墳である。このうち1号墳は墳頂部に箱式石棺が露出していることが知られている。

（参考文献：『美保関町誌』、美保関町誌編さん委員会、昭和61年）



第3図　周辺の遺跡分布図

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	所在地	形態	出土遺物
1	平畑遺跡	散布地	片江・平畑	南向きの緩斜面、集落跡の可能性がある	須恵器、土師器、製塩土器
2	片江横穴墓群	横穴墓	片江・深浦	横穴墓８基、整正家形や丸天井系の天井形態を持ち、羨門部に石組施設を持つものも存在する	不明
3	方結神社裏山古墳	古墳	片江・向畑	墳形不明、箱式石棺	
4	上谷遺跡	散布地	片江・上谷	北向きの緩斜面	須恵器、土製支脚
5	小丸山古墳	古墳	片江・向畑	墳形不明、石室あり？	須恵器？
6	向畑古墳群	古墳群	片江・向畑	古墳６基（墳形不明）、横穴式石室？（２号墳）	須恵器、土師器
7	丁馬古墳群	古墳群	片江・馬ノ背	古墳４基（方墳、円墳）、箱式石棺（１号墳）	刀剣、須恵器？

第３章　調査の概要

調査区は集水井が設置される部分を対象として、長さ 6.3 m、幅 4.8 mの長方形の調査区を設定し、地山面まで掘り下げた。

調査の結果、調査区の東側半分は、幅 1.6 m以上、深さ 1.6 m以上の規模で過去に掘削された形跡（地すべり調査か？）があり、更に暗黄褐色の軟らかい粘質土（第 10 層）で埋め戻されていたため、土層の観察や地山面での遺構の検出は出来なかった。また遺物も含まれていなかった。

（１）土層堆積状況

調査区西壁での観察では、第 1 層は表土で 15 ～ 20cm の厚さを測る。その下には遺物包含層（第 2、3、4、4´ 層）が存在し、調査区の北側（山側）では薄く 25cm、南側（裾側）では厚く 95cm を測る。この包含層中からは古墳時代～奈良時代にかけての須恵器（坏類、甕類、瑞）や土師器（甕類、高坏、かまど、甑）、製塩土器が検出された。

一方、注目される点として、第 4 層は調査区南側で途切れて地山（第 7 層）に変化する状況が見られる。これは地山（第 7 層）が人為的に掘り込まれて第 4 層が堆積した状況を示すものだと考えられるが、ちょうど第 4 層が途切れる地点から第 4 層に非常に良く似た第 4´ 層が地山の上に現れるため、あたかも断層を起こしたかのようにも見られる点が注意される。

（２）検出遺構

地山面において住居跡状の掘り込みが確認された。規模は南北 2.1 mを測るが、東側は撹乱されており、西側は更に調査区外に延びるため、全形は不明である。掘り込みの深さは最大 20cm であるが、西壁の土層観察からでは本来 45cm 程あったものと考えられる。掘り込みの中には茶褐色の粘質土（第 5 層）が堆積していたが、第 5 層中からは土師器の細片が 1 片しか検出されなかった。掘り込みの南側の壁沿いには壁体溝とも思われる幅 6cm、深さ 6cm ほどの小さな溝状遺構（SD － 01）がある。掘り込みの底面（床面？）ではピット 3 箇所、土壙状遺構 1 基が検出された。ピットや土壙はいずれも黒褐色を呈した粘質土の埋土を持つ。Ｐ － 1 は直径 50cm、深さ 30cm を測る大きなピットで、中から自然石が 2 個検出された他に遺物は検出されなかった。Ｐ － 2 は直径 20cm、深さ 20cm、Ｐ － 3 は直径 15cm、深さ 5cm を測る小さなピットで、いずれからも遺物は検出されなかった。やや不整形な土壙（SX － 01）は南北幅 60 ～ 100cm を測る大きなものであるが、深さは最大 20cm 程度で浅いものである。埋土中からの遺物は検出されなかった。

（３）出土遺物について

出土遺物は大きく茶褐色系の遺物包含層中（第 2 ～ 3 層）からの遺物と、黒褐色の遺物包含層中（第 4 層）からの遺物に分けられる。

第 2 ～ 3 層中からの出土遺物としては、須恵器（蓋坏類、瑞）、土師器（高坏、壷甕類、甑）、製塩

土器がある。

須恵器の蓋は、つまみの付かない蓋で口縁部に段を有するもの（No.1）と、つまみを付ける蓋で口縁部にかえりを付けるタイプ（No.2～3）、口縁端部を下に屈曲させるタイプ（No.4～7）のものがある。

須恵器の坏は、口縁端部をわずかに屈曲させるもの（No.8）と外反させるもの（No.9）とがある。高台部破片（No.10、11）はこれら坏類か、もしくは皿類に付随するものであると考えられる。

須恵器の碌（No.19）は口径14.0cm、器高12.9cmを測る。やや小型化した胴部を持ち、底部外面はヘラ切り後ナデ仕上げを行うものである。

土師器の高坏（No.12）は口径16.6cmを測るもので、丸みを持った坏部にやや外反する口縁部を持つものである。

土師器の甕は、「く」字形に外反する口縁部のもの（No.13）と、口縁部は大きく外反するが肩部の張らないもの（No.15）がある。

土師器の壷は、口縁部がわずかに屈曲するもので、小型丸底壷（No.14）と思われるものがある。

甑の破片と思われるものは（No.17）で、直径7㎜の円孔を穿つ。

製塩土器（No.18）は「ハ」字に開く小さな脚部を持つものである。郷の坪遺跡出土製塩土器分類の4類に該当するものである（注1）。

第4層出土のからの出土遺物としては、須恵器（蓋坏類）、土師器（高坏、壷甕類、把手）、鉄製品がある。

須恵器の蓋は、擬宝珠状のつまみを付けるもの（No.24）と、輪状のつまみを付けるもの（No.25）があり、口縁部の形状はかえりを付けるタイプ（No.27）と、口縁端部を下に屈曲させるタイプ（No.26）のものがある。

須恵器の坏は、口縁部の仕上げがをわずかに屈曲させるもの（No.28）と内湾気味に丸くおさめるもの（No.30）とがある。No.30の底部外面には静止糸切り痕が残る。

土師器の甕は、口縁部が大きく外反して開くもの（No.20）と、屈曲するもの（No.21）がある。

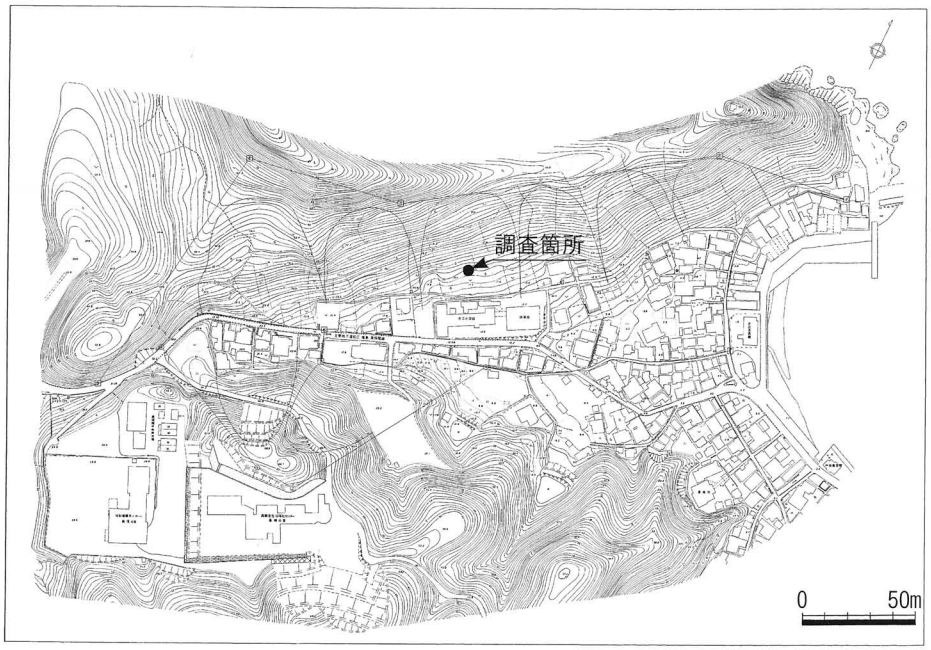
土師器の高坏（No.22）は、裾部で大きく「ハ」字状に開き、直径9㎜の円孔を穿つものである。

土師器の把手（No.23）は、破片であるが、おそらく甑に取り付くものであると考えられる。

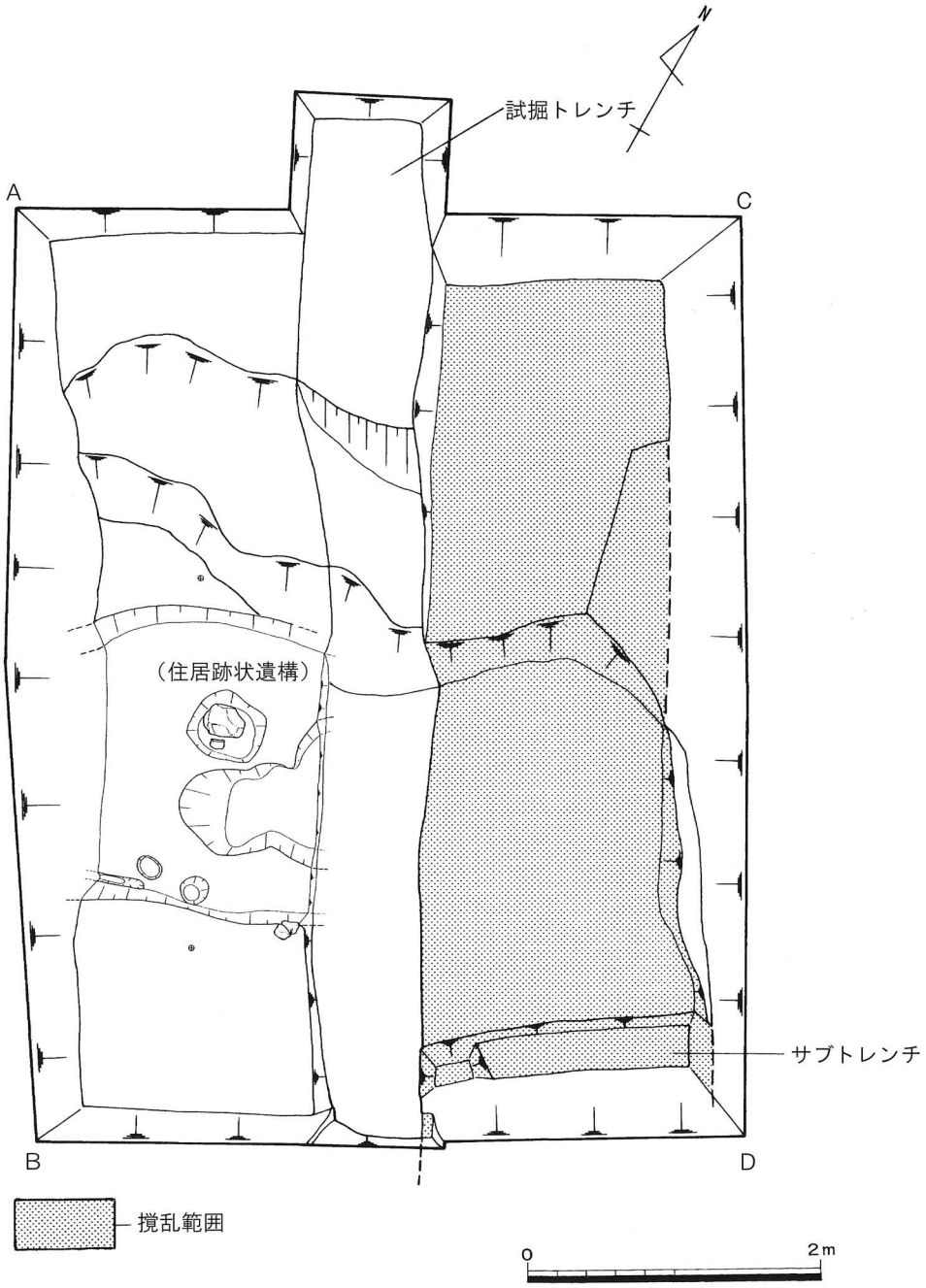
鉄製品（No.31）は、残存長5.0cm、断面径0.8cmを測る。錆化が著しいため、断面形はじめ本来の形状は不明である。

No.32、33は試掘調査時に表土下から出土した土錘である。いずれも胴部が丸く膨らむもので、いずれも長さ3.0cm、胴部径1.7cmを測るものである。

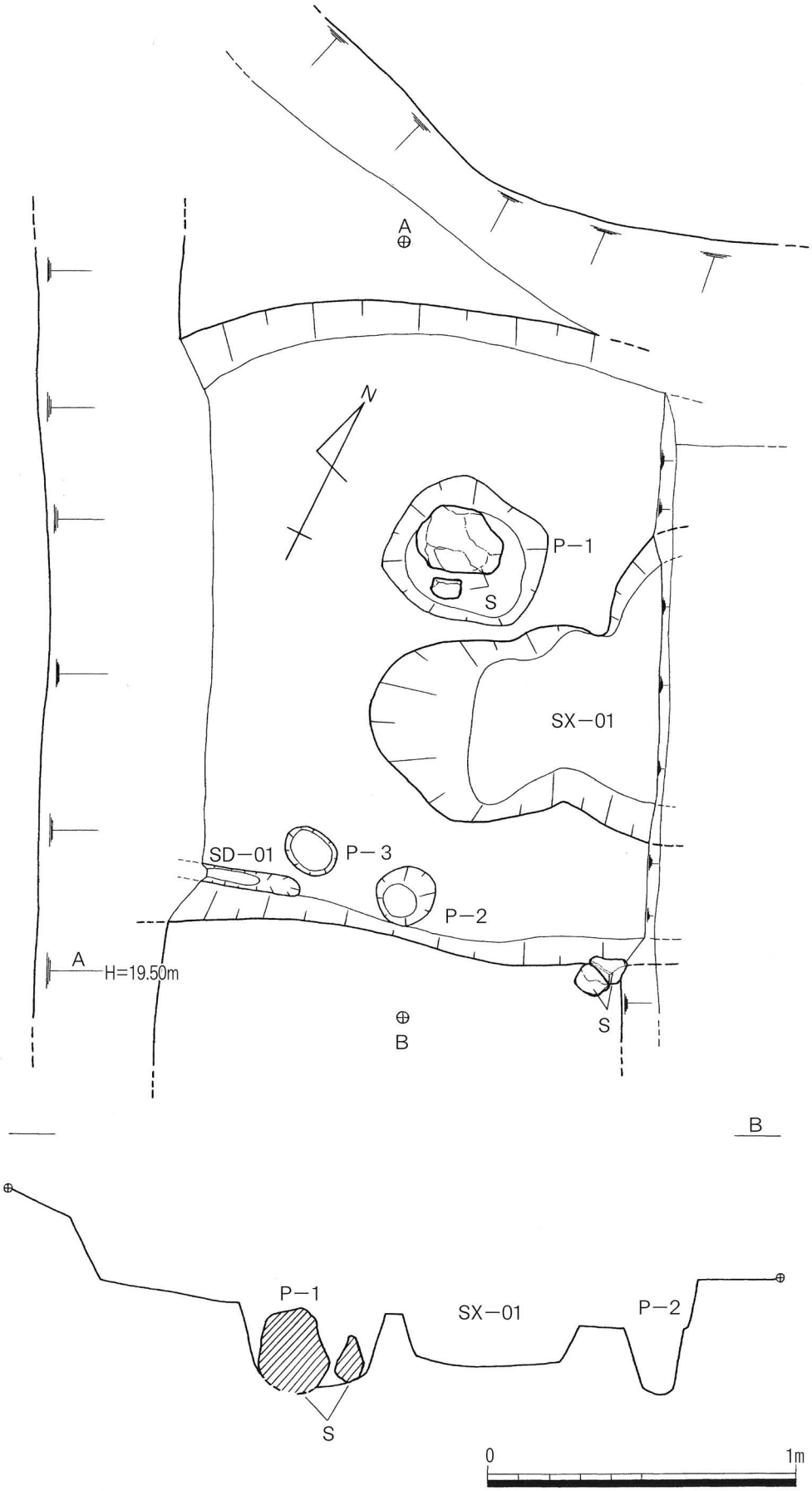
（注1）島根県埋蔵文化財調査センター主幹内田律雄氏の教示による。



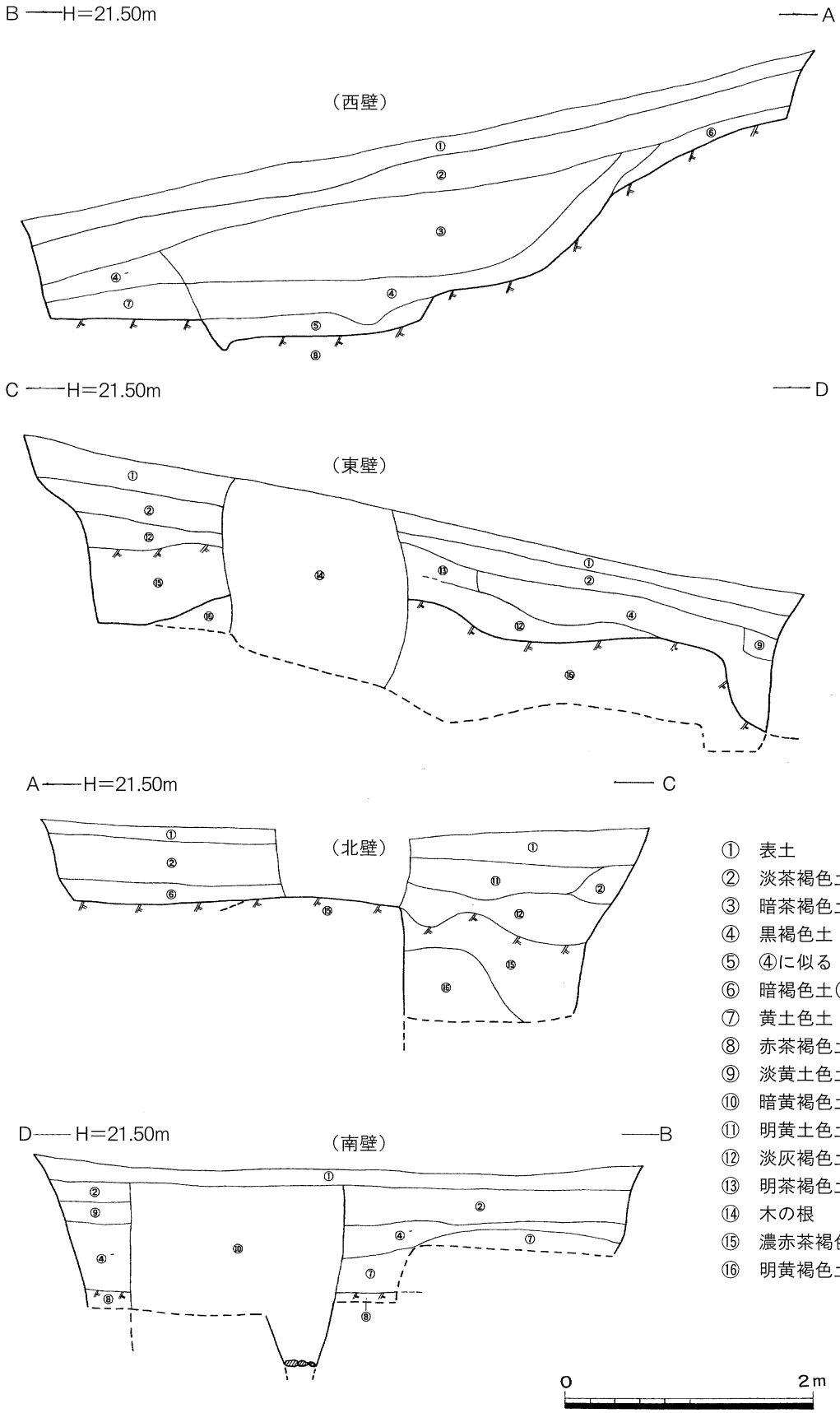
第4図　調査区位置図



第5図　調 査 区 平 面 図

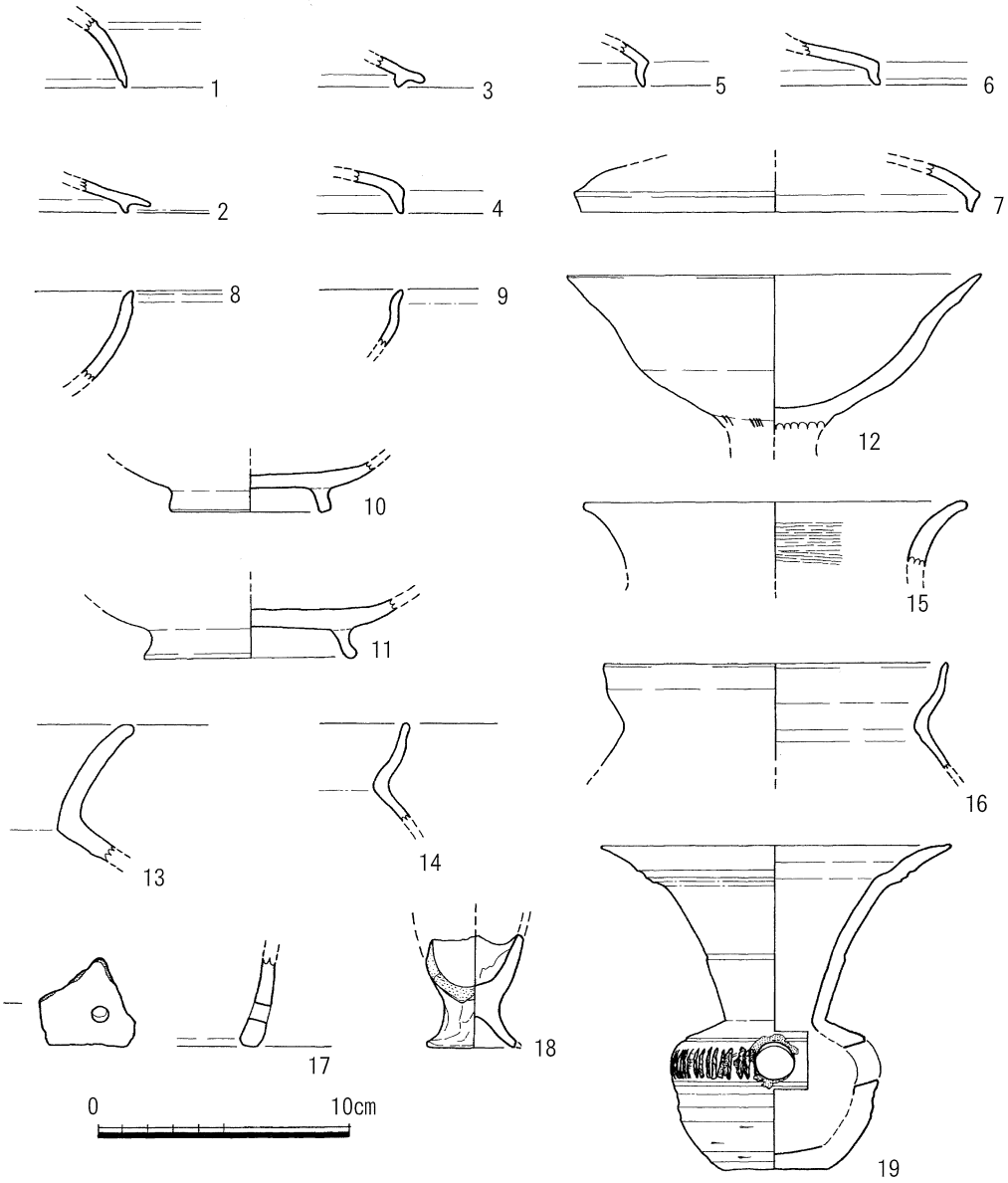


第6図　住居跡状遺構実測図

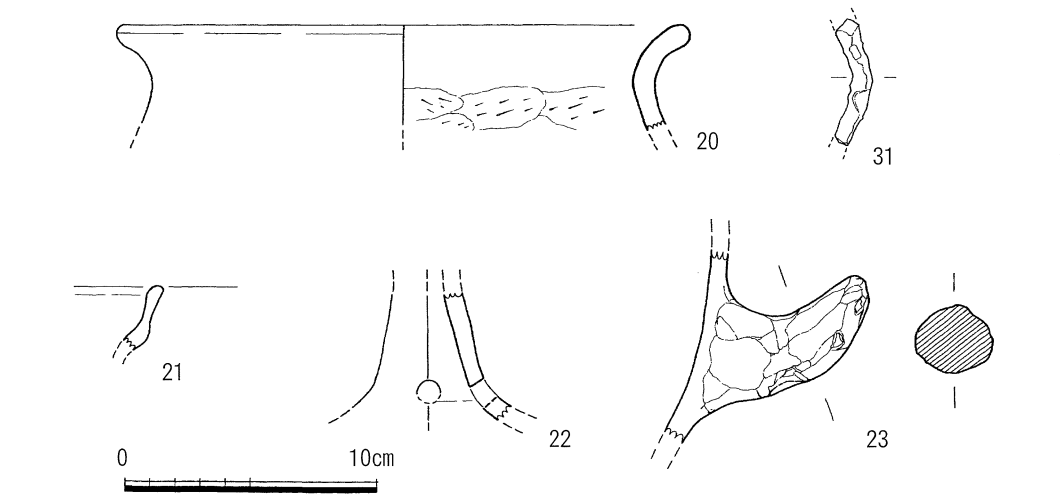


① 表土
② 淡茶褐色土
③ 暗茶褐色土
④ 黒褐色土
⑤ ④に似る
⑥ 暗褐色土（遺物少ない）
⑦ 黄土色土
⑧ 赤茶褐色土
⑨ 淡黄土色土
⑩ 暗黄褐色土（撹乱）
⑪ 明黄土色土
⑫ 淡灰褐色土
⑬ 明茶褐色土
⑭ 木の根
⑮ 濃赤茶褐色岩盤（地山）
⑯ 明黄褐色土（地山）

第7図　土 層 断 面 図

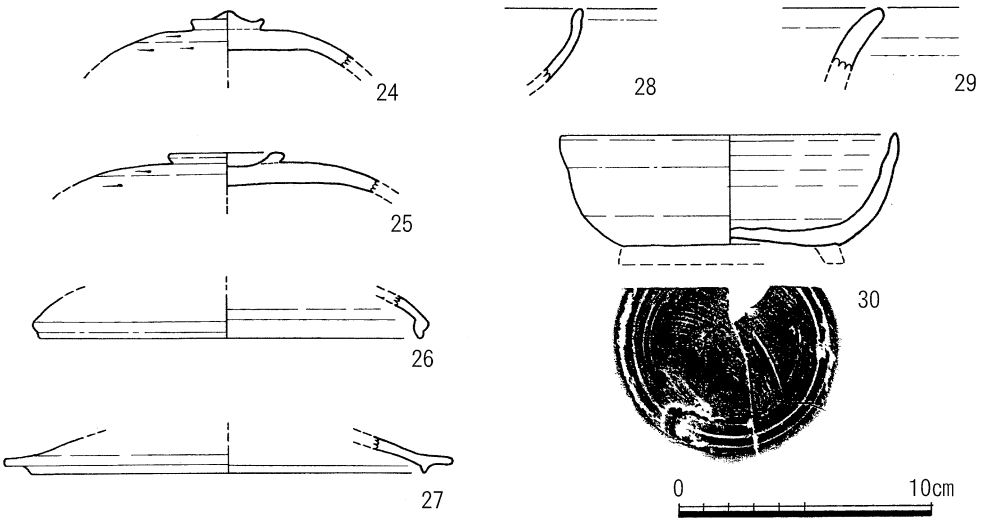


（第２～３層出土遺物）

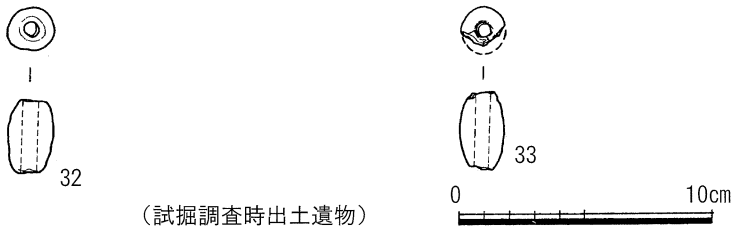


（第４層出土遺物）

第８図　出 土 遺 物 実 測 図



（第４層出土遺物）



（試掘調査時出土遺物）

第９図　出 土 遺 物 実 測 図

第５章　小　　結

今回の調査では、住居跡状遺構が検出されたことから、平畑遺跡は散布地としてだけではなく、集落跡としての可能性もあるものと考えられる。それは①遺跡の立地が南向きの緩斜面であること。②検出された遺物の器種構成が、須恵器の坏類や甕類の他に、土師器の甕類やかまど、土製支脚など煮炊き調理用の器種も見られること。などからも明白である。さらに製塩土器が出土していることや、試掘調査時には土錘が出土していることは、平畑遺跡の性格が海に密着した生活の場であったことを如実に物語るものとして興味深いものである。

遺跡の年代は、出土遺物の年代観より、古墳時代後期から奈良時代にかけての時期であると想定され、従来の遺跡の年代観から大きく外れるものではない。

美保関町の遺跡分布状況を見ると、それまでに人間の活動した形跡がなかった地域に突如として古墳が出現したように見られる地域がいくつかある。このことについて、『美保関町誌』(注２)の中では、「古墳の造営は一般的に、弥生時代に定着した農業生産力の拡大とともに富の集中と蓄積が進行し、政治的・宗教的支配者の出現をみ、その支配者および若干の近親者のために行われたものと理解されているが、（中略）美保関町の古墳分布を見ると、農業生産力が皆無であると思われるところに多数存在しており、農業以外の生産基盤等を考慮する必要がある。」と記されている。また、美保関町森山地区の郷の坪遺跡や伊屋谷遺跡から発見された大量の製塩土器から、「美保関町では農業不適な地域が多いのに横穴式石室が多く分布していることは、製塩や漁労を生業とした集団と無縁であったとはとうてい考えがたい。」とされている。平畑遺跡の存在する片江湾周辺も、古墳時代になって突如として古墳の造営がはじまる地域である。今回の調査で製塩土器が発見されたことは大変有意義であったが、わずかに１個体分しか検出されていないため、当地でも製塩を生業とした専業集団が存在したとは到底言い切れないが、その可能性を示すものとして貴重である。

（注２）美保関町誌編さん委員会『美保関町誌』昭和61年

出 土 遺 物 観 察 表

No.	出土地点	種 別	器 種	法 量	形態の特徴	手法の特徴	そ の 他
1	第２～３層	須恵器	坏蓋	－	口縁端部にわずかに段を有する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：淡灰色
2	第２～３層	須恵器	坏蓋	－	口縁部に短いかえりを付ける	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：灰白色
3	第２～３層	須恵器	坏蓋	－	口縁部に短いかえりを付ける	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：灰色
4	第２～３層	須恵器	坏蓋	－	端部が小さく下方に屈曲する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：やや良好、 色調：淡灰色
5	第２～３層	須恵器	坏蓋	－	端部が小さく下方に屈曲する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：外面赤橙褐色、内面灰白色
6	第２～３層	須恵器	坏蓋	－	端部が小さく下方に屈曲する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：灰～暗灰色
7	第２～３層	須恵器	坏蓋	口径 15.6 cm	端部が小さく下方に屈曲する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：淡灰色
8	第２～３層	須恵器	坏	－	坏部は内弯して開き、端部でわずかに屈曲する。	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：不良、 色調：淡灰色
9	第２～３層	須恵器	坏	－	口縁端部は屈曲して外反する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：不良、 色調：灰白色
10	第２～３層	須恵器	高台部	底径 6.4 cm	坏または皿の高台部で、やや開く	底部外面にナデ痕跡あり、ヘラ記号「×」あり	焼成：良好、 色調：灰～暗灰色
11	第２～３層	須恵器	高台部	底径 8.4 cm	坏または皿の高台部で、やや開く	底部外面に糸切り痕残る	焼成：良好、 色調：淡灰色
12	第２～３層	土師器	高坏	口径 16.6 cm	坏部は内弯して立ち上がり、端部はわずかに外反する	外面に丹塗の痕跡が残る	焼成：良好、 色調：橙褐色
13	第２～３層	土師器	甕	－	口縁部は外反して開く	内外面ナデ仕上げ	焼成：やや良好、 色調：淡茶褐色
14	第２～３層	土師器	壷	－	口縁部はわずかに屈曲する	内外面ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：橙褐色
15	第２～３層	土師器	甕	口径 15.4 cm	口縁部は大きく外反して開く	内外面ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：淡褐色
16	第２～３層	土師器	壷	口径 14.0 cm	口縁部はわずかに屈曲する	内外面ナデ仕上げ	焼成：やや良好、 色調：淡褐色
17	第２～３層	土師器	甑	－	底部付近に直径７㎜の円孔あり	内面ケズリ、外面ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：淡橙褐色
18	第２～３層	土師器	製塩土器	底径 3.8 cm	小さく開く脚部を持つ	内外面に指頭圧痕が残る	焼成：良好、 色調：明褐色
19	第２～３層	須恵器	瑞	口径 14.0 cm 底径 4.2 cm 器高 12.9 cm	口縁部は外反して大きく開く、胴部に直径1.5cmの円孔、刺突文あり	胴部下半～底部にかけて回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ仕上げ	焼成：やや良好、 色調：淡赤褐色
20	第　４　層	土師器	甕	口径 22.8 cm	口縁部は外反して大きく開く	口縁部内外面ナデ仕上げ、胴部内面ヘラケズリ	焼成：良好、 色調：淡褐色
21	第　４　層	土師器	甕	－	口縁部は屈曲する	内外面ナデ仕上げ	焼成：やや良好、 色調：灰褐色～黒色
22	第　４　層	土師器	高坏	－	裾部で大きく「ハ」字状に開く、直径９㎜の円孔あり	風化のため不明	焼成：良好、 色調：橙褐色
23	第　４　層	土師器	把手	径 2.7 cm	甑の把手か？	指頭圧痕が残る	焼成：良好、 色調：淡橙褐色
24	第　４　層	須恵器	坏蓋	つまみ径 3.0 cm	擬宝珠状つまみを付ける	天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデ仕上げ	焼成：やや不良、 色調：緑灰色
25	第　４　層	須恵器	坏蓋	つまみ径 4.5 cm	輪状つまみを付ける	天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデ仕上げ	焼成：やや不良、 色調：灰色
26	第　４　層	須恵器	坏蓋	口径 15.4 cm	端部は下方に小さく屈曲する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：淡灰色
27	第　４　層	須恵器	坏蓋	口径 15.6 cm	口縁端部にかえりを付ける	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：やや良好、 色調：灰白色
28	第　４　層	須恵器	坏	－	口縁部は内弯して開き、端部はわずかに屈曲する	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：やや不良、 色調：緑灰色
29	第　４　層	須恵器	甕	－	口縁部は外反して開く	内外面回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：灰色
30	第　４　層	須恵器	高台坏	口径 13.4 cm 器高 4.3 cm	平底の底部からゆるやかに内弯して立ち上がり、やや内弯気味に口縁部にいたる	底部外面静止糸切りのちナデ仕上げ、その他は回転ナデ仕上げ	焼成：良好、 色調：灰色
31	第　４　層	鉄製品	不明	残存長 5.0 cm 断面径 0.8 cm	湾曲する		
32	試掘調査時 表　土　下	土製品	土錘	全長 3.0cm 胴部径 1.7 cm	胴部は丸く膨らむ		焼成：良好、 色調：灰～黒灰色
33	試掘調査時 表　土　下	土製品	土錘	全長 3.0cm 胴部径 1.7 cm	胴部は丸く膨らむ		焼成：良好、 色調：灰～黒灰色

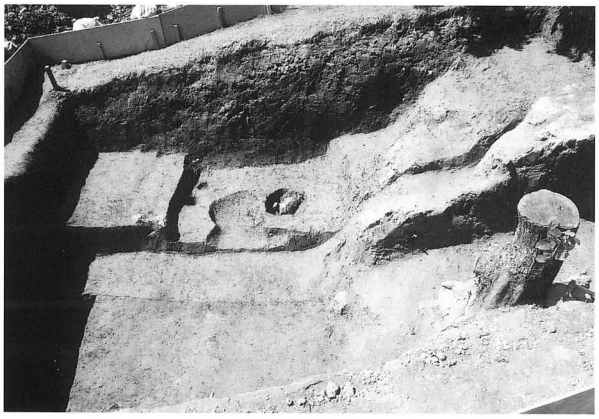
平畑遺跡調査前全景（南方より）

調査前近景（南東より）

住居跡状遺構（SX－01）検出状況（南東より）

SX－01、P－1半掘状況（南東より）

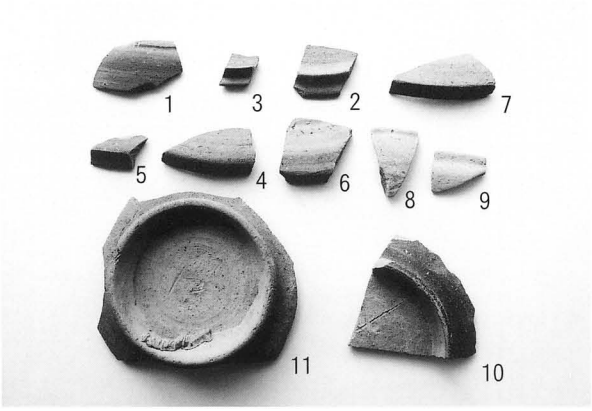
SX－01完掘状況（南東より）



調査区完掘状況（東方より）

調査区完掘状況（南方より）

調査区完掘状況（北方より）

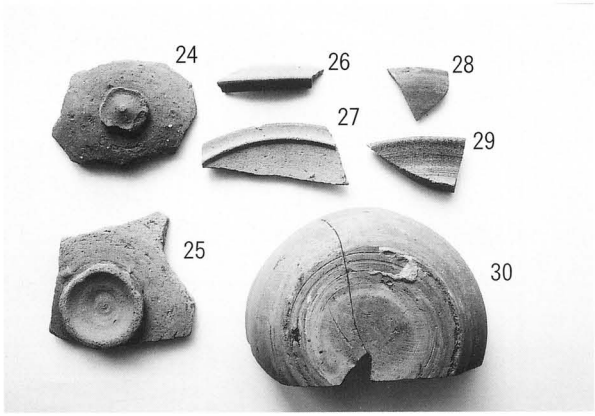


第２～３層出土遺物（須恵器坏類）

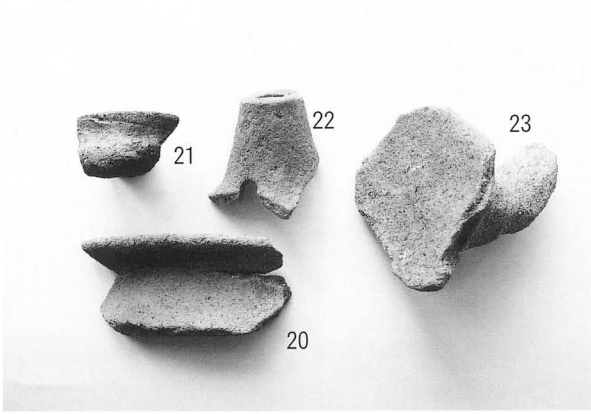
第２～３層出土遺物（須恵器瑕）

第２～３層出土遺物（土師器）

第２～３層出土遺物（製塩土器）



第４層出土遺物（須恵器）



第４層出土遺物（土師器）

第４層出土遺物（鉄製品）

試掘調査時出土土錘

報 告 書 抄 録

フリガナ	カタエチクジスベリタイサクコウジニトモナウ ヒラハタイセキマイゾウブンカザイハックツチョウサホウコクショ
書名	片江地区地すべり対策工事に伴う 平畑遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第105集
編集者名	飯塚康行
編集機関	松江市教育委員会
所在地	〒690－8540 島根県松江市末次町86番地 TEL（0852）55－5294
発行年月日	西暦2006年3月20日

所収遺跡	平畑遺跡（ひらはたいせき）			コード	
所在地	島根県松江市美保関町			市町村	遺跡番号
北緯	35° 33′ 45″	東経	133° 11′ 7″	32201	Ⅰ 61（島根県遺跡番号）

調査期間	調査面積
2005年8月30日～2005年9月12日	30㎡

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平畑遺跡	散布地 住居跡	古墳時代～ 奈良時代	住居跡状遺構	須恵器 土師器 製塩土器	

松江市文化財調査報告書第105集

片江地区地すべり対策工事に伴う

平畑遺跡発掘調査報告書

2006 年 3 月
発行　松江市教育委員会
松江市末次町 86 番地
印刷　有限会社松本印刷
松江市八雲町 258 番地 1